

第3講：135 「皆丸い心で」

天理大学人文学部教授
岡田 正彦 Masahiko Okada

今回の公開講座では、次の逸話をもとに「丸い心」について考えてみました。

一三五 皆丸い心で

明治十六、七年頃の話。久保小三郎が、子供の楢治郎の眼病を救けて頂いて、お礼詣りに、妻子を連れておちばへ帰らせて頂いた時のことである。

教祖は、赤衣を召してお居間に端座して居られた。取次に導かれて御前へ出た小三郎夫婦は、畏れ多さに、頭も上げられない程恐縮していた。

しかし、楢治郎は、当時七、八才の子供のこととて、気がねもなくあたりを見廻わしていると、教祖^{かたわ}の側らに置いてあった葡萄が目についた。それで、その葡萄をジッと見詰めていると、教祖は、静かにその一房をお手になされて、

「よう帰って来なはったなあ。これを上げましょう。世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで。この道は、先永う楽しんで通る道や程に。」

と、仰せになって、それを楢治郎に下された。

＊

この逸話に登場する「久保小三郎」は、明治17、18年頃に長男・楢治郎の目の障りをたすけられて入信しました。さまざまところで引用されるこのエピソードは、入信間もない小三郎の家族が教祖のもとを訪れたときの逸話です。当時、奈良市山間部の田原地区周辺にはいくつかの講社も結成されていました。久保小三郎は、明治19年にこの地域の信仰者をまとめた講社が結成された際に講元となります。さらに講社の寄り処の普請とともに教会設置を出願し、明治23年に田原支教会が設置されると、その初代会長に就任しました。

逸話のなかで葡萄をジッと見つめていた久保楢治郎は、明治11年に久保小三郎、ナラエの長男として出生します。逸話にあるように、幼少の頃からお屋敷の人々と慣れ親しんだ楢治郎は、明治26年に本部青年となり、大分や栃木へ布教に赴くなど、青年期から一貫して、熱心に道のうえに尽くす生涯を送ります。明治42年に、父である初代会長の跡を継いで田原分教会の2代会長に就任してからは、教区活動や教会の運営に力を注ぎました。幼少期から一貫して、お道に尽くし切ったその生涯をみると、教祖が幼い楢治郎におかけになった「この道は、先永う楽しんで通る道や程に」というお言葉が、より深く心に沁みてきます。

＊

また、この逸話のなかで印象に残るのは、やはり教祖の側らに置いてあった葡萄でしょうか。江戸時代から葡萄は、建物の日陰樹として広く栽培されていたようですが、明治10年代には大阪の柏原市や藤井寺市のあたりで「甲州ぶどう」の本格的な栽培がはじまり、この地域の主要な産業の一つになりました。明治16、17年頃の中山家には、河内方面の人々が多く出入りしていましたので、この逸話に登場する葡萄は、現在の甲州ぶどうに近い立派なブドウであった可能性は高いでしょう。ジッと見つめていたくらいですから、それなりに大きな実がついていたのではないのでしょうか。

たぶん、当時の子どもにとっては高級品と言えそうな葡萄の房を手渡しながら、教祖は「世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸

い心で、つながり合うて行くのやで」という、印象的なお言葉を仰せになります。特別なシチュエーションで記憶に刻まれた言葉は、しばしば人生のさまざまな局面で人々を支える力になり、人生を支える金言になることがあります。このとき教祖が仰せになったお言葉は、お下りいただいた葡萄の房のイメージとともに、幼い楢治郎の心に深く刻み込まれたのではないのでしょうか。

＊

また、このとき教祖が仰せられた「丸い心」とは、いったいどのような心のあり方なのでしょう。三原典（「おふでさき」、「みかぐらうた」、「おさしづ」）には、「丸い心」という表現は見当たりません。『天理教教典』にも使われていない表現です。その一方で、仏教の法話や倫理的な徳目を説く文章では、しばしば使われる表現の一つです。その場合は、四角や三角にあるカドやとがった突起の無い丸い心は、他者との軋轢を生じず人を傷つけない、といった意味になることが多いようです。

この逸話では、幼い子どもがジッと見ていた葡萄の房を手渡しながらかたわは人間世界の理想のあり方をやさしく説かれています。丸い葡萄の粒がつながり合って、一つの葡萄の房をつくるように、一人ひとりの人間が「丸い心」でつながり合う世界。このあたりは、一般的な表現の「丸い心」と共通するところがあるように感じます。

原典に参照できないこのお言葉の意味は、このとき手渡された葡萄の房と切り離して考えるべきではないでしょう。「世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで」という教祖のお言葉を考えるとき、やはり葡萄にたとえられた「丸い心」は、この世界／社会を構成する人間一人ひとりが理想とすべき、心のあり方について説かれた言葉なのだと思います。そして教祖は、この未来のビジョンをこれからの時代に生きる、幼い子どもに対して示していることを忘れてはならないでしょう。

＊

かつて、近代日本の著名な思想家である丸山眞男は、戦後の日本社会の再生のために、「である」論理・「である」価値の社会から、「する」論理・「する」価値の社会への移行を強調しました。戦後の日本社会は、基本的に成熟した近代社会の実現を目指してきました。その一方で、物質的には豊かになったが「無縁社会」といった殺伐とした言葉が人口に膾炙し、システム化した無機質な社会において人と人との絆が希薄化するなかで、かつての日本社会における濃密な人間関係を懐かしく感じる人も少なくないでしょう。

前近代の地縁・血縁が支配する社会は、自由な意思にもとづく自己実現を認めない制度化された相互扶助の社会であり、個人の自由は厳しく制限されていました。イメージ化するならば、数珠玉のような人と人とのつながりです。しかし、教祖が未来のビジョンとして示された葡萄の房の一粒一粒は、身動きの出来ない数珠玉のように互いを結び付けるのではなく、皆それぞれに個別の軸を通して枝から木の幹につながることによって、はじめて身(実)を寄せ合っています。

一人ひとりの個性と自立は尊重しながら、存在の根源を共有することによって、人々が互いに寄り添い合う世界。教祖が示した理想の世界のイメージは、伝統的共同体の解体と近代社会の矛盾に直面して、方向性を見失いかけている現代社会の未来に、極めて明確な指針を示すものではないのでしょうか。